



福島での日々から学ぶ、
有事の際のコミュニケーション。

東日本大震災から2年半が過ぎましたが、現在もさまざまな課題が残されています。

「福島で起きていることを科学的な側面から知り、自分で論理的に考えることの重要性に気付いてもらいたかった」と渡邊さん。

セッションでは、一般市民・

マスコミ・科学者などから幅

広く講演者を選出。渡邊さんは、講演後の討論において、日本では緊急性の高い問題に対応するリスクコミュニケーションの仕組みが薄いことが浮き彫りになったと分析し、その理由を2つ挙げました。

「まず、情報発信側（政府や専門家）が、果たすべき行動をしなかったこと。次に、情報受信側（国民）にも受け入れるための基礎知識がなく、自らが論理的に考えられなかったことです」

サイエンスアゴラ2012

を通じ、情報の流し手の教育だけでなく、受け手の教育にも注力すべきという思いを強め、渡邊さんは福島県などで討論会を続けています。特に力を入れているのは、将来、情報の受け手となる小中学生への「放射線教育」です。

この夏は、経験したことのない大きな竜巻といった異常気象が日本列島を襲いました。自らの命が危険にさらされたとき、自分で考え行動できるよう、リスクコミュニケーションのためのプロジェクトや研究が、ますます重要になると思われます。